



わた  
た  
し  
だ  
け  
の  
人  
魚  
姫

WATERFALL

2年前の夏

私は内浦を

——浦の星女学院を離れた



何もかもを  
放り出して——





うちの家は内浦でも——  
いえ国内外でもそれなりに  
名の通ったホテルチェーンを  
展開している

そのお陰でいわゆる  
セレブな暮らしをして来たし

幼い頃から経営学を中心に  
色々な教育を受けてきた

鞠莉ちゃんは  
さすがお父様に似て  
優秀ね

ヴァイオリン  
コンクールで  
1位ですって

乗馬にヴァイオリン  
お勉強だって  
優秀だそうで

これは将来が  
楽しみですな

お父様も  
お母様も嬉しそう



流石  
ミスター・オハラ  
の  
自慢の娘だ

可愛い服にアクセサリー  
仕立てのいい家具  
快適な移動手段

欲しいものはなんだって  
目の前にあつたし  
なければ手に入れられるよう  
努力すればいいだけの事  
そう思っていた

だけど

高校進学の際  
名の通った進学校を蹴った私は  
父と激しく衝突し  
家族の反対を押し切り  
浦の星女学院に入学した

そんな事もあり  
度々海外留学をもちかけられた

そんなものは受ける気が  
なかったけれど

だって

浦女には

果南とダイヤがいたから



2人は  
私の知らなかった  
様々な事を  
教えてくれた



1泊20万もする  
ホテルの  
オーシャンビューより  
浜辺で3人で見ると  
夕陽の方が  
何倍も美しい事も





この時間の夕陽が  
綺麗なんだと



子供のように笑う  
親友の笑顔が  
美しい事

沢山の「はじめて」を

教えてもらい

私は

果敢といえるだけで

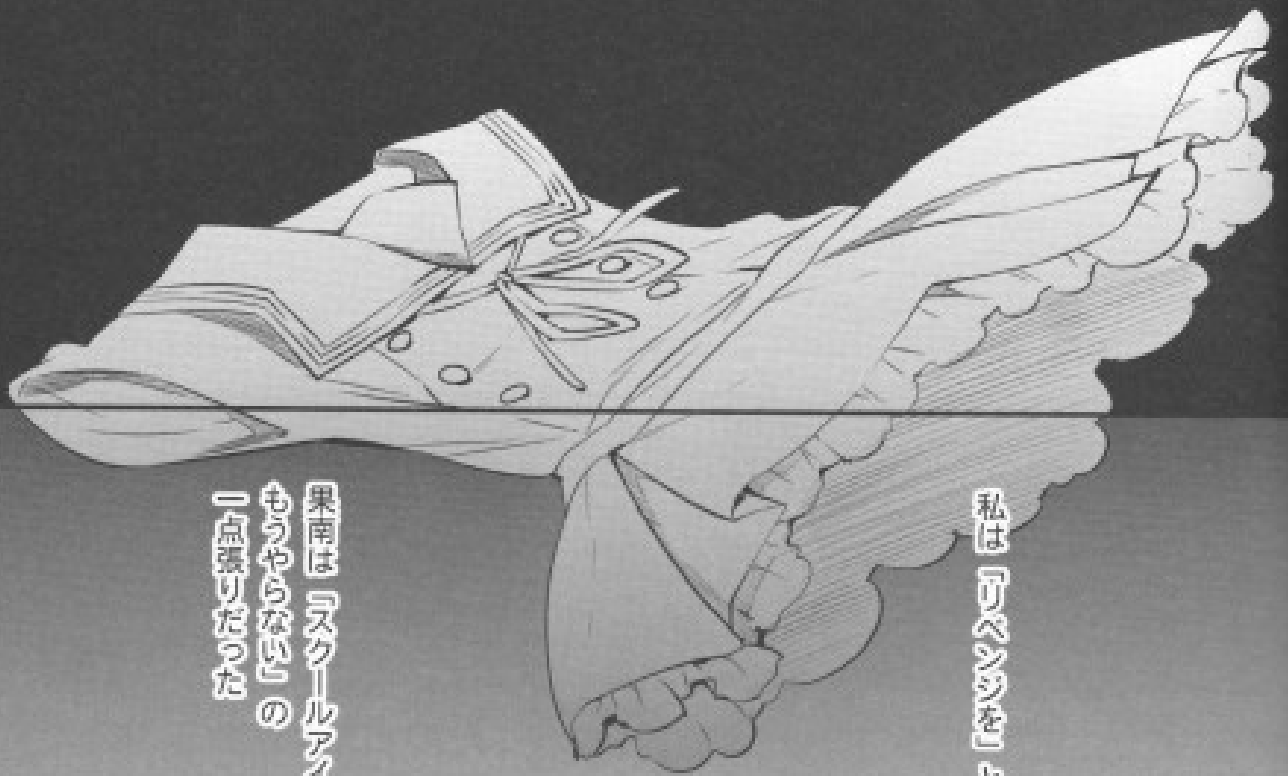
何度も

何度も



恋に落ちた

だけで



私は「おんな」です

果南は「スクールアイドルはもうやらない」の一点張りだった

ただ私はもう一度あの子をステージに立たせたかった

——「おんな」

——この浦女で

あの頃  
私たちはお互いにとても不器用だった



私は想いを  
ぶつけるしか出来ず

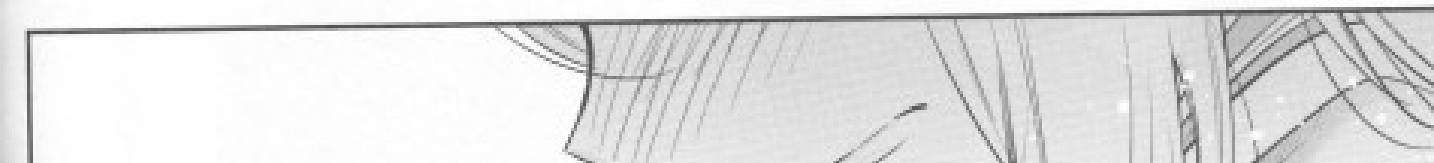


あの子は想いを  
ひた隠しにして





私たちは  
ただただ不器用で





私立浦の星女学院 留学願書

ねえ

「今」の私たちはどうかな？

2年で少しは成長できた？

あなたたちと離れていた2年

私は



果南

！  
シャワー浴びて  
すっきりした？



—  
鞠莉



……なんでこんな時期に  
戻って来たの？  
留学……もしかして  
途中で切り上げたり  
してない？

スクールアイドルの  
ため？  
むこうの学校  
すっごいとこなんで  
しょ？  
それなのに……

学校のために  
鞠莉の人生  
めちやく——



確かに予定では  
もう少し先まで  
むこうにいるはずだったけど

もう！ いやあな  
戻って来ちゃった  
少しは自分の事  
大事にしてよ！

2年前私たちがどんな気持ちで  
鞠莉を送り出したか——

だからと





……誰かが言うには  
普通の家庭とは  
違うのかも知れない

幼い頃から  
将来 父の事業を  
継ぐのを囑望され

私もそれが当然と  
思っ生きてきたし  
それに見合う努力もしてきた

セレブな生活  
高い学歴……そういうのが  
大事なのもわかってる

だったら！

でもね

私  
わがままなの

知ってるけど

えっ


頑固でわがままで  
うるさいし  
じっとしてないし  
何を考えてるか  
わかんないし

OH... OH...

で




頑張り屋なものも知ってる



……ありがとう  
果南


あの時は  
どうしても果南が  
スクールアイドルは  
やらないってわかって  
やけくそで  
留学を決めたけど



でも決めたの  
やけくそでもなんでも  
一度決めたんだから  
トコトンやってやろうって

だって 果南とダイヤが  
送り出して  
くれたんだもん

2人がくれた時間だから  
1分1秒だって無駄に  
したくなかった



お陰で  
カレッジの卒業資格取って  
博士号も取って  
おまけに  
理事長にまでなっちゃった

まがはほ  
あふち

いや  
おまけって……

カレッジ

——だから

心配しなくても  
私の人生は  
順風満帆なまま

だって  
欲しいものは  
絶対諦めたりしない  
私は――

小原鞠莉だもん





……ばか

鞠莉ってば  
格好良すぎ

ばかって！

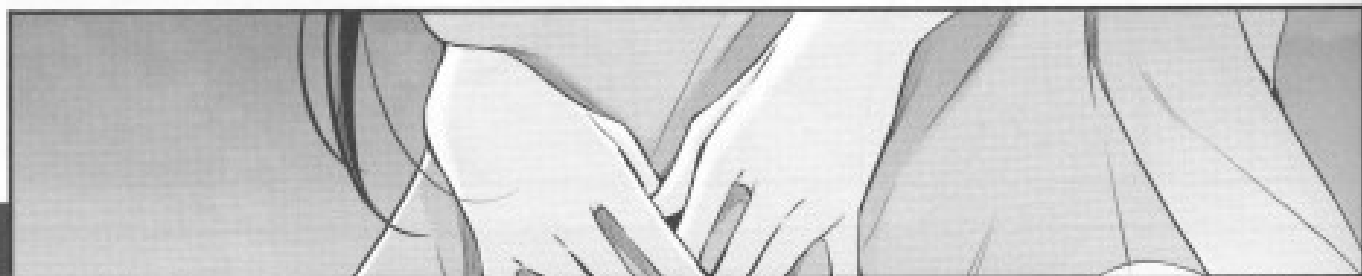


……でも私だって

鞠莉のために  
何年だって  
ずっと待ってるつもり  
だったよ

離ればなれに  
なっても……  
私は鞠莉のこと

忘れないから



……うん  
知ってる

*うん*







果南……

って鞠莉  
ちよつと  
待った!

え?



2年前……最後の時は  
鞠莉にされたままだったから  
順番で言えば今度は私の番だよっ!

細かい

ホワツツ!?  
別にどっちでもいい——

良くないっ  
言ったでしょ!

鞠莉  
果南




んんん

んんん

かなー



……言っただけじゃ



私だって  
ずっと鞠莉の事  
待ってたんだから

かあああ

もう待てないよ





鞠莉……



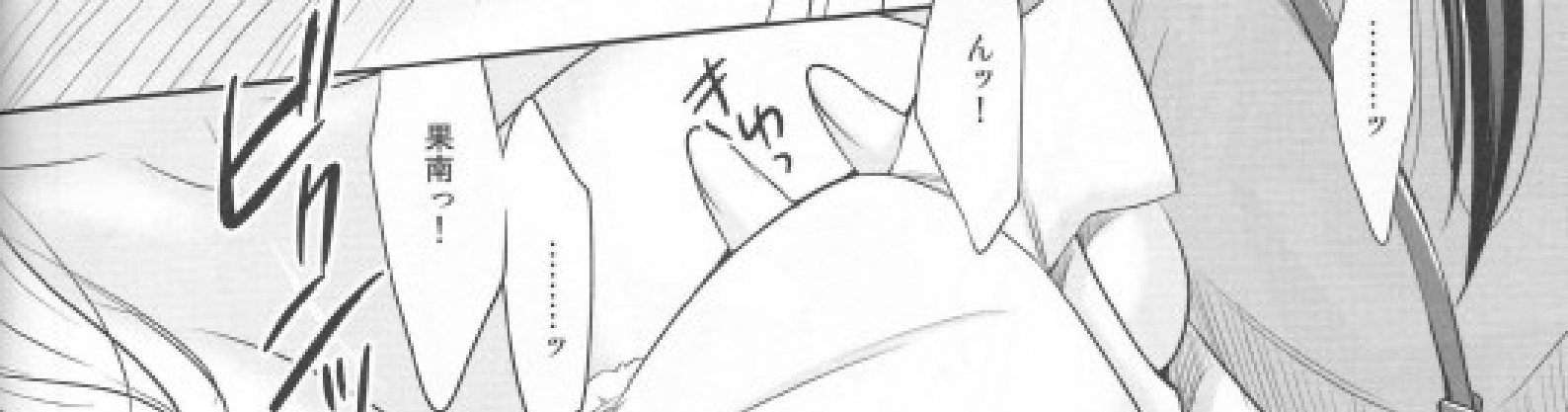
鞠莉……



んっ！

果南っ！

……っ







果南っ！



……鞠莉……



かな……

はっ

はっ

はっ

あ……っ  
……果南……っ



[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]


は

は


あ

朝明けそうだよ





やっぱりホテルからの  
オーシャンビュー  
最高かも



一晩中とか  
どんだけ体力  
あるのよ

てか

眺めはホテルからでも  
浜辺からでもどっちでも  
いいんじゃない

もうー！

ばか果南

んんんんんん  
んんんんんん

……で 果南  
今日の早朝トレーニングは？  
日課でしょ

もう行くの？

んー  
今日は鞠莉もいるし  
いいかな

もうしばらく  
鞠莉といたいし







